

アジアの村落開発における

持続可能な発展のための教育の可能性についての研究

A study on the possibility of education for sustainable development
in rural areas of Asia

金田 卓也¹, 石井 雅幸², 矢野 博之³, 下田 敦子⁴
Takuya Kaneda¹, Masayuki Ishii², Hiroshi Yano³, Atsuko Shimoda⁴

¹大妻女子大学家政学部児童学科, ²大妻女子大学家政学部児童学科, ³大妻女子大学家政学部児童学科,
⁴大妻女子大学人間生活文化研究所

キーワード : アジア, 持続可能な発展, 教育

Key words : Asia, Sustainable development, Education

1. 研究目的

本研究の目的は、ネパール、タイ、ミャンマーの村落地域において「持続可能な開発のための教育」(ESD: Education for Sustainable Development) を実践するために伝統的な知識や技術を教育の中でどのように生かしていくか、その具体的な方法と課題を「持続可能な開発目標」(SDGs: Sustainable Development Goals) と関連させて明らかにすることである。

これまで発展途上国では先進国型の学校教育をどのように実現できるかという方向に視点が向けられてきた。しかし、アジアの発展途上国、とりわけ村落地域においては教育の質は著しく低く、都市部の生徒たちと競争することはかなり難しい。都市部の学校に進学できた場合は、職のない村に戻ってくるケースはきわめて少ない。成績優秀な子どもたちは恩恵を受けられるが、そうではない子どもたちが村に残ることになる。勉学を続けることのできなかつた若者の多くは肉体労働による現金収入獲得のために中東諸国等に出稼ぎに行かざるを得ないという教育による格差拡大の現実がある。

新型コロナウイルスの感染拡大はグローバル化によって加速された国境を越えた人の移動とも深く関わっている。本研究の調査対象となっているネパール、タイ、ミャンマーの村落地域においても新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けることになり、世界規模での経済活動の縮小は村人の生活の困窮化をもたらす結果となっている。

このような状況の中、村落地域の学校教育の質的変革と共に村に残される若者、とりわけ出稼ぎに行くこともできず村に留まらざるを得ない女性たちの生活の向上につながる学校以外の場での教育は大切である。

SDGs を見ても貧困の解決や水とトイレの確保など発展途上国には解決しなければならない先進国とは異なる問題が山積している。SDGs が発展途上国だけではなく先進国共通のゴールとして示されているように持続可能な発展は先進国と発展途上国が共通の問題意識を持って進めていく必要がある。調査対象としているネパール、タイ、ミャンマーという異なる地域であっても、SDGs という共通した視点で課題を共有化していくことはきわめて重要である。

2. 研究実施内容

2020年春から新型コロナウイルス感染状況が世界的規模で拡大したため、予定していた海外での現地調査を断念せざるを得なくなった。それに伴い、当初予定していた本研究プロジェクトの調査のほとんどを実施することができなかつたが、現地とのやり取りの中で進められたアートプロジェクトの一部を報告しておきたい。

Yellow Dream Project¹⁾として始められたムラバリ村で栽培されているウコンを用いた染色も少しずつではあるが、定着しつつある。ウコンの量や布を浸す時間を調整することにより写真1のように異なる色合いを出すことができる。絞り染めの

技法により模様をつけることも可能になった。

このウコン染めを村の女性たちのエンパワーメントのためのインフォーマル教育としてどのように発展させるかということは今後の課題である。

3. 竹組みの集会所

前回の共同研究プロジェクトでは萱で屋根を葺くところまで報告した竹組みの集会所の建設は、外壁の作業に入った。子どもたちも作業に関わっており、これは学校教育ではない共同体内のひとつのインフォーマルな教育の場として位置付けることができよう。ウコン染めに象徴される村の持続可能な発展のシンボルカラーにちなみ外壁を黄色系の塗料で塗ることになった。

ムラバリ村においてもイタリアの現代アート作家ミケランジェロ・ピストレット (Michelangelo Pistoletto) 氏の参加型プロジェクト『第三のパラダイス』 (Third Paradise)²⁾を試みているが、金田は2018年よりスイスのジュネーヴにあるインターナショナル・スクール Ecolint での『第三のパラダイス』にも関わってきた。

Ecolint ではコロナ禍の中でこれまでと異なった形でのアートワークショップが模索されていたが、スマホの Messenger を用いたコミュニケーションによるネパールのムラバリ村とのコラボレーションを提案した。Ecolint の高校生とムラバリ村の高校生とのコラボレーションである。

ムラバリ村では高校生たちが Ecolint から送られてきた画像をもとに竹の集会所の外壁に『第三のパラダイス』のシンボルを描くことになった。

画面の半分は新型コロナウイルスの感染拡大が終息した後、Ecolint の生徒たちがネパールを訪れることができたときに仕上げられるように残された。Ecolint では、学びの中心に SDGs を掲げており、その点においてもこのコラボレーションは教育的に大きな意味を持っているといえる。また、村人からの提案で集会所内部の壁面にも壁画が描かれることになり、これまでのアートプロジェクトの経験が生かされた結果となった。

4. まとめと今後の課題

2020年度は新型コロナウイルス感染状況の拡大により現地調査を実施することができなかった。2021年度中においても海外調査は困難なことが予想されるので、それぞれの調査地において研究協力者による聞き取り調査や映像資料の提供を中心

に事前準備を進め、海外渡航再開後すぐに現地調査に着手できるようにしておきたい。

*掲載した写真に写っている人物に関しては、現地の協力者を通して許諾を得ており、個人情報等に関しては十分な倫理的配慮を行った。

5. この助成による発表論文等

① 学会発表 金田卓也. “社会関与型アートプロジェクトと美術教育”. 美術教育研究会 第26回研究大会. 2020年12月27日. 東京藝術大学.



写真1. ウコン染め



写真2. 竹の集会所 外壁



写真3. 竹の集会所 内部

註

1)・2)金田卓也. “ネパールの村落における社会関与型アートプロジェクトと芸術教育”. 人間生活文化研究. 2020, No. 30, p. 543-545